

※ 適用は ■ 印を記入する。

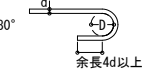
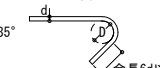
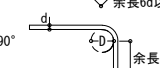
新鉄筋コンクリート構造配筋標準図(1)

1. 一般事項

- (1) 構造図面に記載された事項は、本標準図に優先して適用する。
- (2) 記号
- d…異形棒鋼の呼び名に用いた数値 (径) D…部材の成、又は鉄筋内法直径
- @…間隔 r…半径 C…中心線 L…部分間の内法距離 h…部材間の内法高さ
- S T…あばら筋 H O O P…帯筋 S. H O O P…補強帯筋

2. 鉄筋加工

(1) 鉄筋の折り曲げ加工

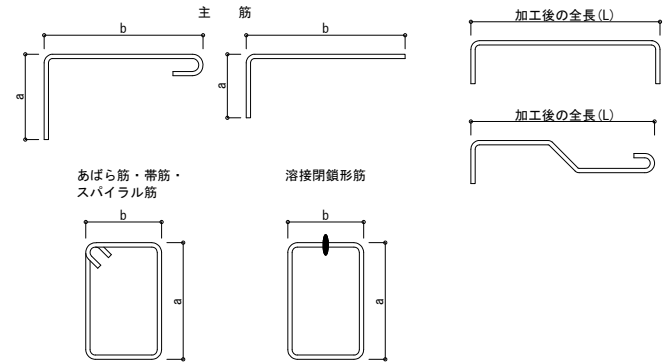
図	折り曲げ角度	鉄筋の種類	鉄筋の径による区分	鉄筋の折り曲げ内法直径(D)
	180°	SD295A SD295B SD345	D16以下	3d以上
	135°		D19～D41	4d以上
	90°	SD390	D41以下	5d以上
		SD490	D25以下	5d以上
			D29～D41	6d以上

- [注] (1) dは呼び名に用いた数値とする。
- (2) スパイラル筋の重ね継手部に90° フックを用いる場合は、余長は12d以上とする。
- (3) 片持ちスラブ先端、壁筋の自由端側の先端で90° フックまたは135° フックを用いる場合は、余長は4d以上とする。
- (4) スラブ筋、壁筋には、溶接金網を除いて丸鋼を使用しない。
- (5) 折り曲げ内法直径を上表の数値よりも小さくする場合は、事前に鉄筋の曲げ試験を行い支障ないことを確認した上で、工事監理者の承認を得る。
- (6) SD490の鉄筋を90° を超える曲げ角度で折り曲げ加工する場合は、事前に鉄筋の曲げ試験を行い、支障ないことを確認した上で、工事監理者の承認を得る。

(2) 加工寸法の許容差

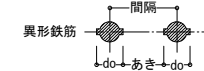
項 目		符 号	許 容 差 (mm)
各加工寸法 ⁽¹⁾	主 筋	D25以下	a, b ± 15
		D29以上D41以下	a, b ± 20
	あばら筋・帯筋・スパイラル筋	a, b	± 5
加工後の全長		L	± 20

[注] (1) 各加工寸法及び加工後の全長の測り方の例を下図に示す。



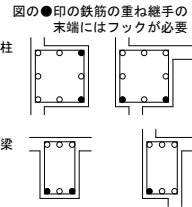
(3) 鉄筋のあき

異形鉄筋では呼び名に用いた数値1.5d以上、粗骨材の最大寸法の1.25倍以上かつ25mmのうち最も大きい値。



(4) 鉄筋のフック

- a～eに示す鉄筋の末端部にはフックを付ける。
- a. あばら筋、帯筋、および幅止メ筋
- b. 煙突の鉄筋 (壁の一部となる場合を含む)
- c. 柱、梁 (基礎梁は除く) の出すみ部分
および下端の両端にある場合の鉄筋 (右図参照)
- d. 単純梁の下端筋
- e. その他、本配筋標準に記載する箇所



(5) かぶり厚

1. 最少かぶり厚さは、規定する設計かぶり厚さを10mm減じた値とする。
2. 設計かぶり厚さは、コンクリート打込み時の変形・移動などを考慮して、最少かぶり厚さが確保されるように、部位・部材ごとに定めるものとし、表記以上の値とする。

設計のかぶり厚さ (単位: mm)

構造体の計画供用期間の級		標準・長期		超長期	
部材の種類		屋 内	屋 外 ⁽²⁾	屋 内	屋 外 ⁽²⁾
構造部材	柱・梁・耐力壁	40	50	40	50
	床スラブ・屋根スラブ	30	40	40	50
非構造部材	構造部材と同等の耐久性を要求する部材	30	40	40	50
	計画供用期間中に維持保全を行う部材 ⁽¹⁾	30	40	(30)	(40)

直接土に接する柱・梁・壁・床および布基礎の立上り部分、擁壁の壁部分

基礎、擁壁の基礎、底壁

注) (1) 計画供用期間の級が超長期で計画供用期間中に維持保全を行う部材では、維持保全の周期に応じて定める。

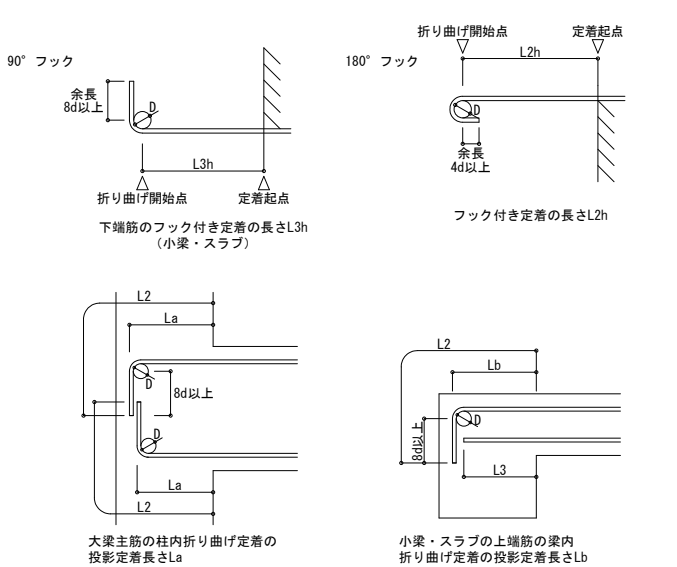
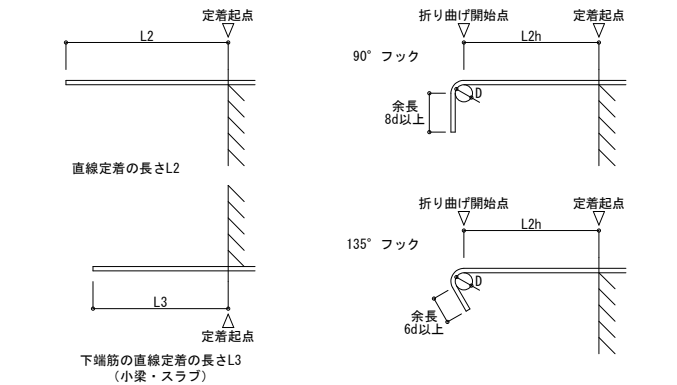
(2) 計画供用期間の級が標準、長期および超長期で、耐久性上有効な仕上げを施す場合は、屋外側では設計かぶり厚さを 10mm減じることができる。

3. 完成した構造体の各部位における最外側鉄筋のかぶり厚さは、最小かぶり厚さ以上とする。
4. コンクリート構造体に誘発目地・施工目地などを設ける場合は、建築基準法施行令第79条に規定する数値を満足し、構造耐力上必要な断面寸法を確保し、防水上および耐久性上有効な措置を講じれば上記によらなくても良い。

(6) 定着長さ

鉄筋種別	コンクリートの設計基準強度 F_c (N/mm ²)	定 着 の 長 さ						
		一 般				小梁下端筋		
		L2 (フックなし)	L2h (フックあり)	La ⁽³⁾	Lb	L3 (フックなし)	L3h (フックあり)	L3 (フックなし)
SD295A SD295B	18	40d	30d	20d	15d	20d	10d	10d かつ 150以上
	21	35d	25d	15d	15d			
	24～27	30d	20d	15d	15d			
	30～36	30d	20d	15d	15d			
	39～45	25d	15d	15d	15d			
	48～60	25d	15d	15d	15d			
SD345	18	40d	30d	20d	20d	20d	10d	10d かつ 150以上
	21	35d	25d	20d	20d			
	24～27	35d	25d	20d	15d			
	30～36	30d	20d	15d	15d			
	39～45	30d	20d	15d	15d			
	48～60	25d	15d	15d	15d			
SD390	21	40d	30d	20d	20d	—	—	—
	24～27	40d	30d	20d	20d			
	30～36	35d	25d	20d	15d			
	39～45	35d	25d	15d	15d			
	48～60	30d	20d	15d	15d			
	48～60	30d	20d	15d	15d			
SD490	24～27	45d	35d	25d	—	—	—	—
	30～36	40d	30d	25d	—			
	39～45	40d	30d	20d	—			
	48～60	35d	25d	20d	—			

- [注] (1) フック付き鉄筋の定着長さL2hは、定着起点から鉄筋の折り曲げ開始点までの距離とし、折り曲げ開始点以降のフック部は定着長さに含まない。
- (2) フック部の折り曲げ内法直径D及び余長は、「鉄筋の折り曲げ加工」の表による。
- (3) 梁主筋を柱へ定着する場合、水平定着長さがL2h確保できない場合は折り曲げ定着とし、全定着長をL2以上とするとともに、水平投影長さをLa以上とし、余長を8d以上とする。尚、Laの値は原則として柱せいの3/4倍以上とする。
- (4) 耐圧スラブの下端筋の定着長は一般定着L2とする。



(7) 継手

■重ね継手

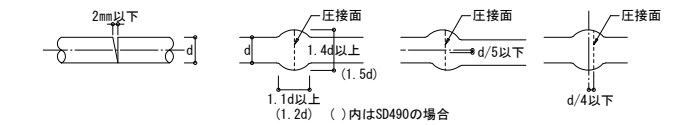
鉄筋種別	コンクリートの設計基準強度 F_c (N/mm ²)	重ね継手長さ	
		L1 (フックなし)	L1h (フックあり)
SD295A SD295B	18	45d	35d
	21	40d	30d
	24～27	35d	25d
	30～36	35d	25d
	39～45	30d	20d
	48～60	30d	20d
SD345	18	50d	35d
	21	45d	30d
	24～27	40d	30d
	30～36	35d	25d
	39～45	35d	25d
	48～60	30d	20d
SD390	21	50d	35d
	24～27	45d	35d
	30～36	40d	30d
	39～45	40d	30d
	48～60	35d	25d
	48～60	35d	25d
SD490	24～27	55d	40d
	30～36	50d	35d
	39～45	45d	35d
	48～60	40d	30d

- [注] (1) 表中のdは、異形鉄筋の呼び名の数値を表し、丸鋼には適用しない。
- (2) 直径の異なる鉄筋相互の重ね継手の長さは、細い方のdによる。
- (3) フック付き重ね継手の長さは、鉄筋相互の折り曲げ開始点間の距離とし、折り曲げ開始点以降のフック部は継手長さに含まない。

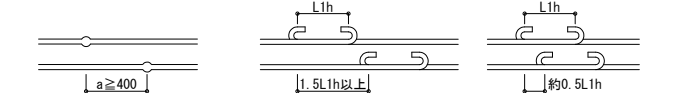
■継手に関する注意点

1. 継手位置は、応力の小さい位置に設けることを原則とする。
2. D29以上の異形鉄筋は、原則として、重ね継手としてはならない。
3. 鉄筋径dの差が7mmを超える場合は、圧接としてはならない。
4. ガス圧接継手の形状、および継手の配置は下図による。

・ガス圧接形状 (平成12年建設省告示1463号下図のほか、折れ曲がり、焼き割れ、へこみ、垂れ下がり及び内部欠損がないもの)



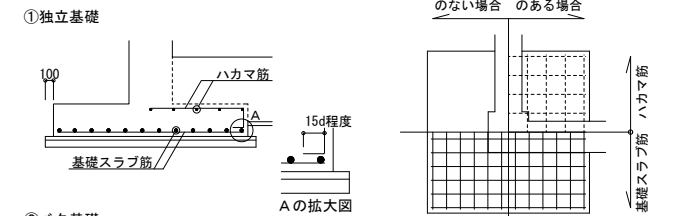
・圧接継手



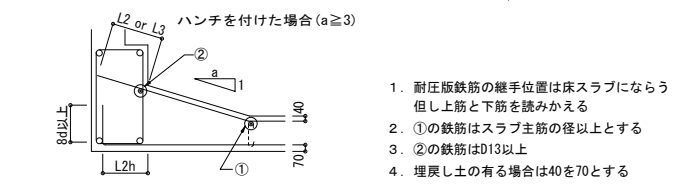
5. 溶接継手および機械式継手を用いる場合は、信頼できる機関の評定を受けたA級継手工法とする。
6. 非破壊検査は工事監理者が承諾した信頼できる検査機関で行うこと。

3. 杭・基礎 (配筋については地震力等の水平力等を考慮して別途検討すること)

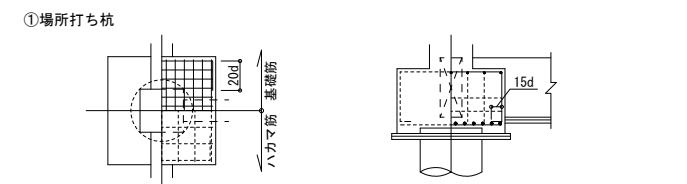
(1) 直接基礎



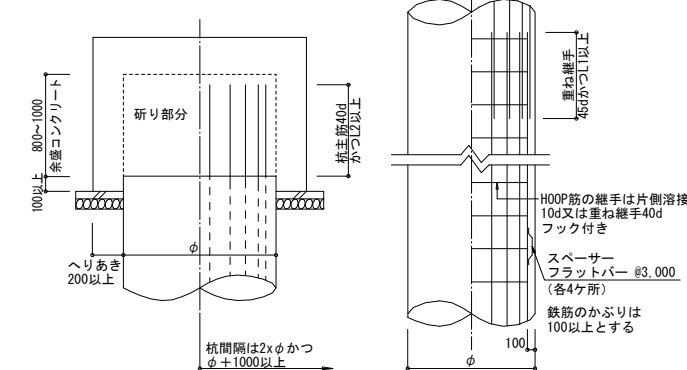
(2) 杭基礎



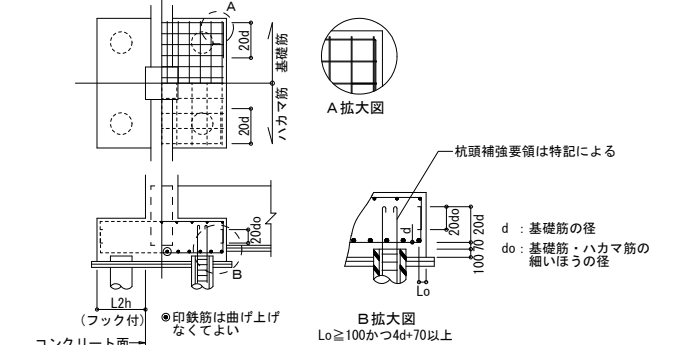
(3) 基礎接合部の補強



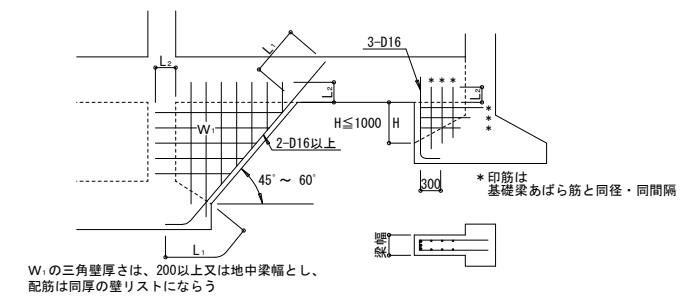
(4) 杭頭処理要領



(5) PHC杭



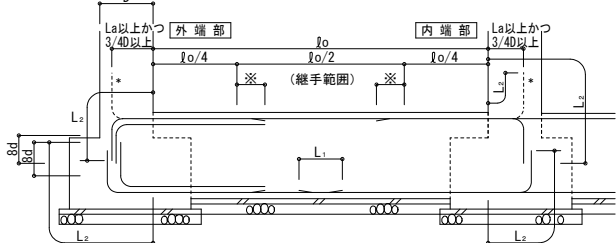
(6) 基礎接合部の補強



新鉄筋コンクリート構造配筋標準図(2)

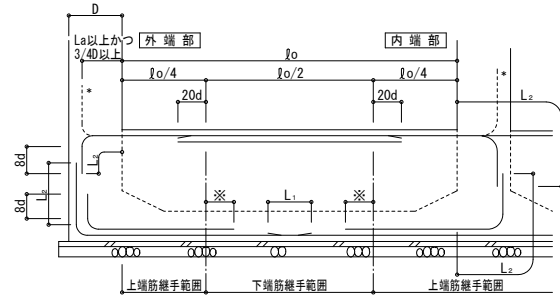
4. 地中梁 ※ L₂ = 40d とする。

(1) 独立基礎、杭基礎の場合でスラブが付かない場合（定着、継手）
(スラブが付く場合の継手は 6. (2) 大梁継手位置とする。)



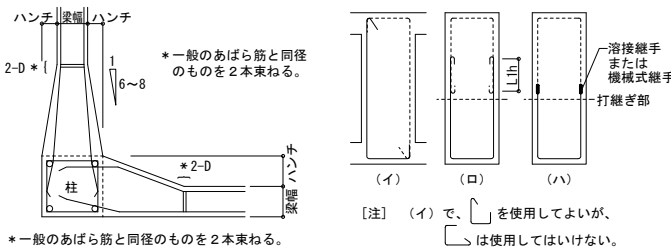
※主筋のカットオフ長さは $l_o/4 + 15d$ を基本とし、特別な長さを要する部分は 6. 大梁の項の表 6-1 による。

(2) 布基礎、べた基礎、耐圧スラブが付く場合（定着、継手）

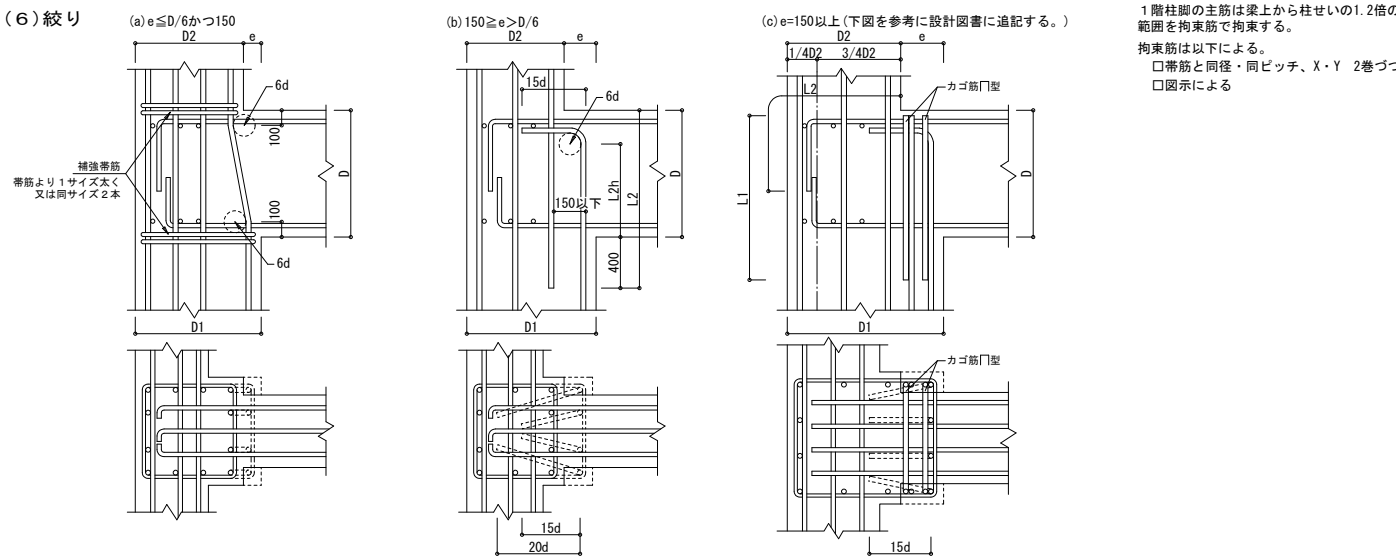


※主筋のカットオフ長さは $l_o/4 + 15d$ を基本とし、特別な長さを要する部分は 6. 大梁の項の表 6-1 による。

(3) 水平ハンチの場合のあばら筋加工要領 (4) せいの高い梁のあばら筋加工要領図

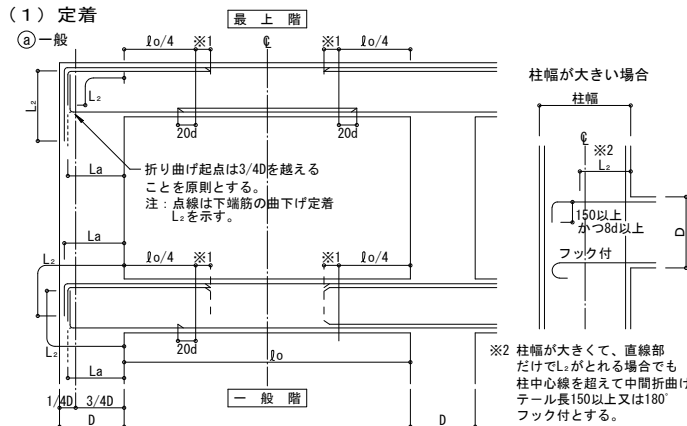


(6) 絞り



6. 大梁 ※ L₂ = 40d とする。

(1) 定着



※1 主筋のカットオフ長さは $l_o/4 + 15d$ を基本とし、特別な長さを要する部分は表 6-1 による。

(b) ハンチが有る場合

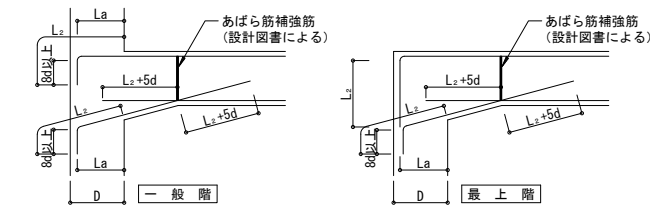
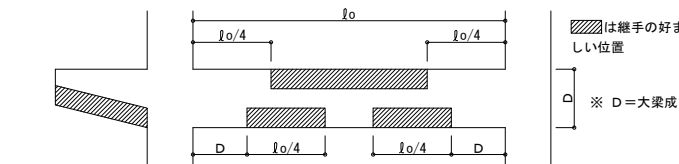


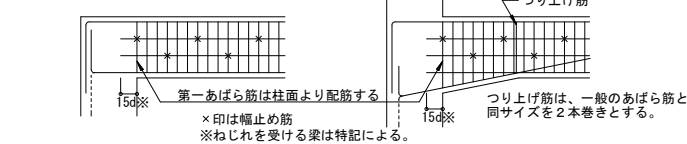
表 6-1 特別なカットオフ長さを要する部材 (mm)

部 材 名	$l_o/4$ に加える長さ	部 材 名	$l_o/4$ に加える長さ

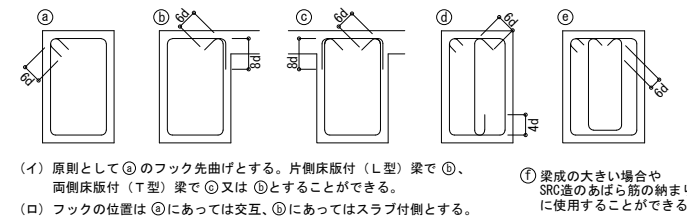
(2) 大梁主筋の継手 (SA 級、A 級継手を使用する場合の継手位置は特記による。)



(3) あばら筋、腹筋、幅止めの配置



(4) あばら筋の型 (注、床版がない場合は 135° 以上のフックとする。)

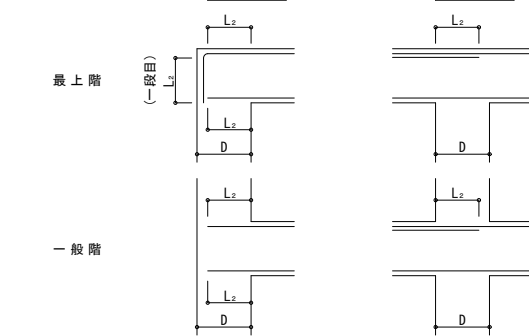


(5) 幅止め筋の本数、加工

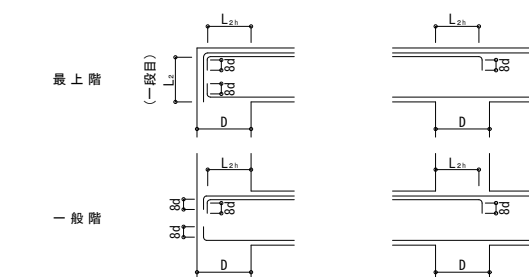
	D < 600	不要
腹 筋	600 ≤ D < 900	2-D10 1 段
	900 ≤ D < 1200	4-D10 2 段
	1200 ≤ D	D10@300 以内
	1200 以上	D13@300 以内
幅止め筋	D10@1000 以内で割り付ける	

(6) 梁主筋の定着

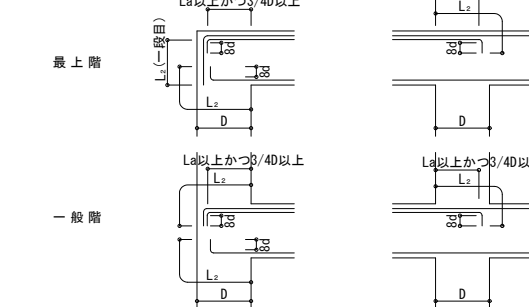
① 直線定着



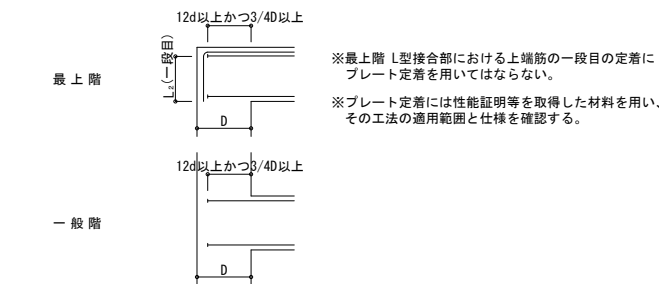
② 90° フック付直線定着



③ 折曲げ定着

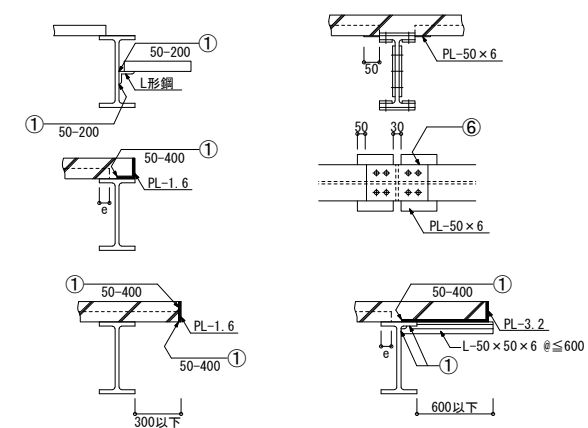
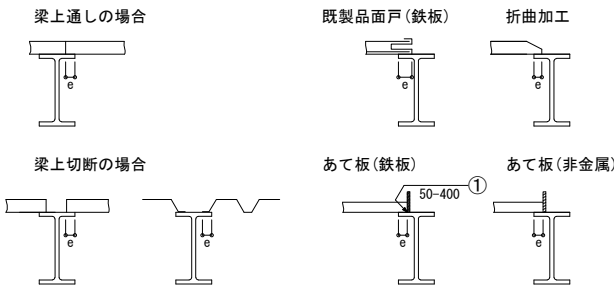
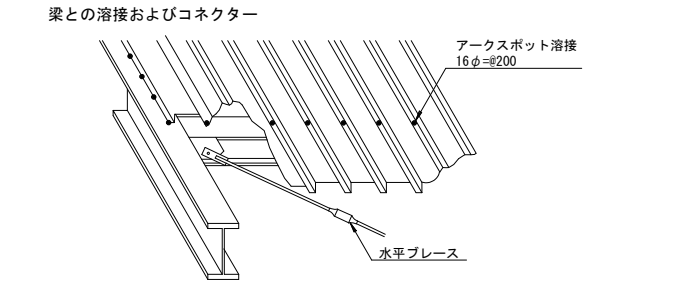
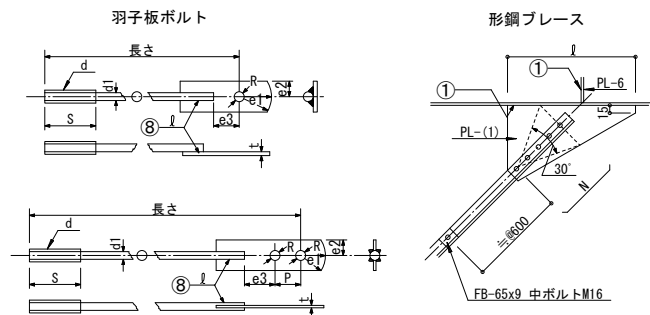


④ プレート定着

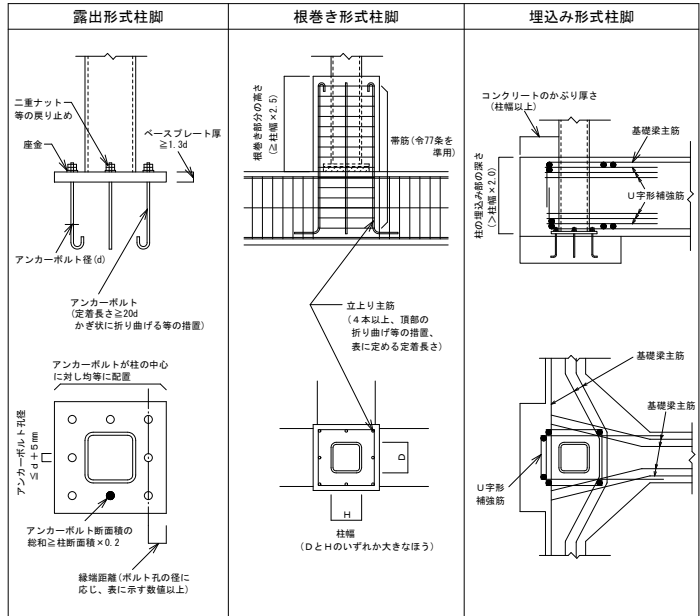


[illegible]

符 号	部 材	PL-(1)	N-径	l



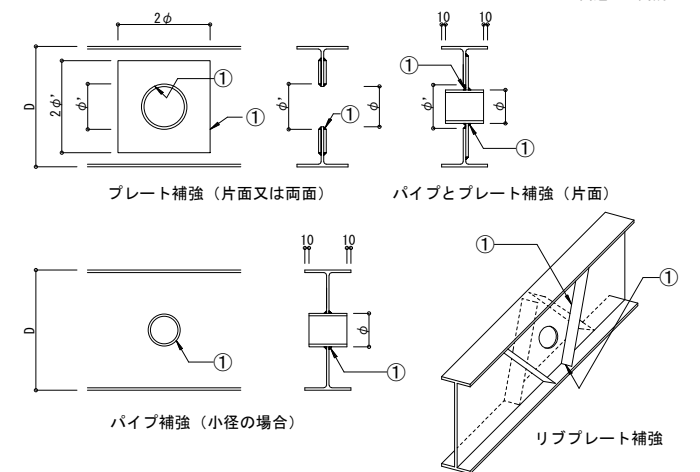
注) 許容応力度計算を行わなかった場合の構造形式
※ 構造用アンカーボルトは原則としてJIS B 1220, JIS B 1221を使用する。



スタッド材の標準形状・寸法		スタッド材			
形状 	呼び名	軸径d mm	頭径D mm	頭高さT mm	呼び長さL mm
	φ13mm	13	25	8	□80 □100 □120 □
	φ16mm	16	29	8	□80 □100 □120 □
	φ19mm	19	32	10	□80 □100 □120 □150 □
	φ22mm	22	35	10	□80 □100 □120 □150 □
	φ25mm	25	41	12	□120 □150 □170 □

- 計算で確認された場合は下図の位置、寸法及び補強方法によらずに良い。
- 梁端部（内法スパン l_0 の1/10以内かつ、2D以内）は避ける。
- $\phi \leq 0.4D$
- ϕ' は補強板の穴径を示す

貫通孔の間隔



スリーブ径	補 強 板
$\phi \leq 0.15D$	補強板不要
$\phi \leq D/4$	Web板厚以上（片面）
$\phi \leq D/3$	Web板厚 $\times 1.2$ 倍以上（片面）
$\phi \leq 0.4D$	Web板厚以上（両面）

ボーリング柱状図

調 査 名

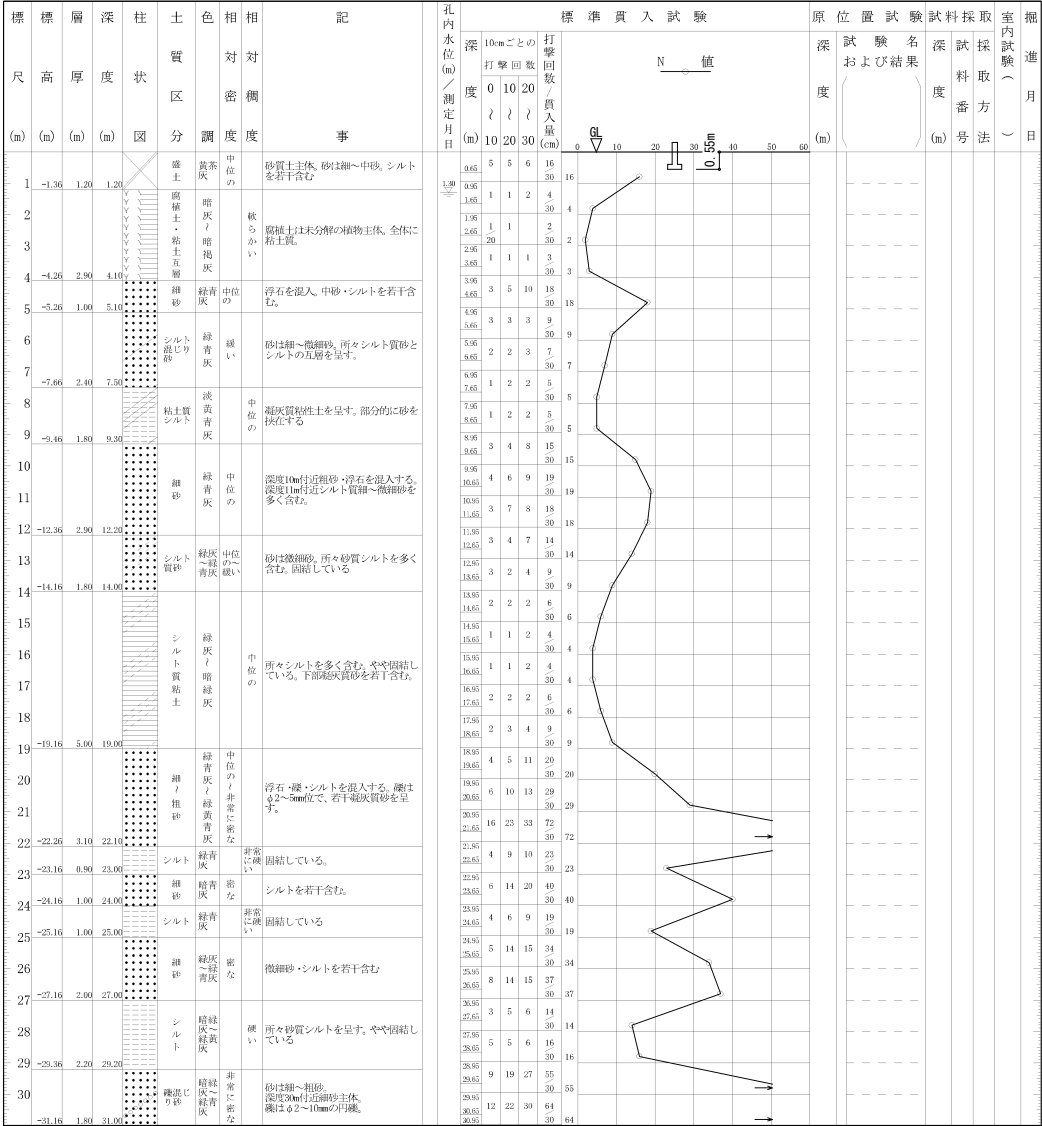
役場庁舎建設用地耐力調査

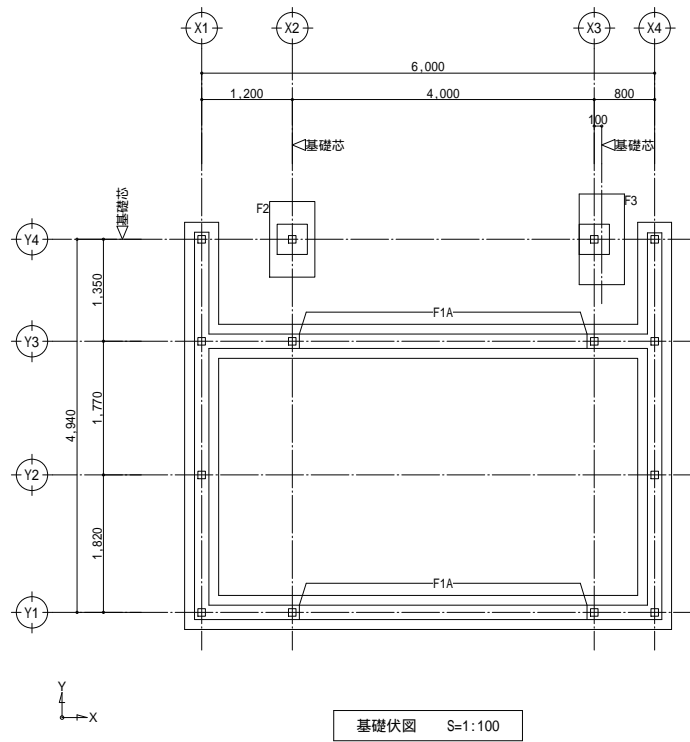
ボーリングNo

事業・工事名

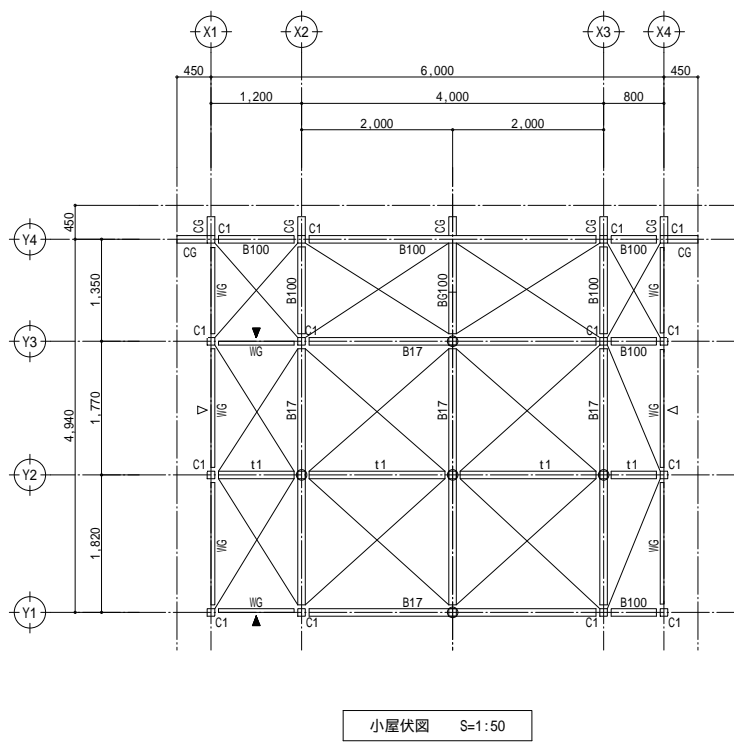
シートのNo

ボーリング名	No. 3		調査位置	青森県西津軽郡木造町若緑地内		北 緯
発 注 機 関	青森県木造町		調査期間	昭和 61年 4月 日 ~ 61年 4月 日		東 経
調査業者名	有限会社 西北ボーリング工業	主任技師	浜山 安信	現 場 代 理 人	コ ア 鑑 定 者	ボーリング責任者
孔 口 標 高	GH -0.163m	角	180° 上 90° 下 0°	方 向	北 0° 270° 西 90° 東 180° 南	地盤勾配 鉛直 90° 水平 0°
総掘進長	31.00m	度	0°	向	180°	南
使用機種	エンジン		ハンマー落下用具		ポン プ	

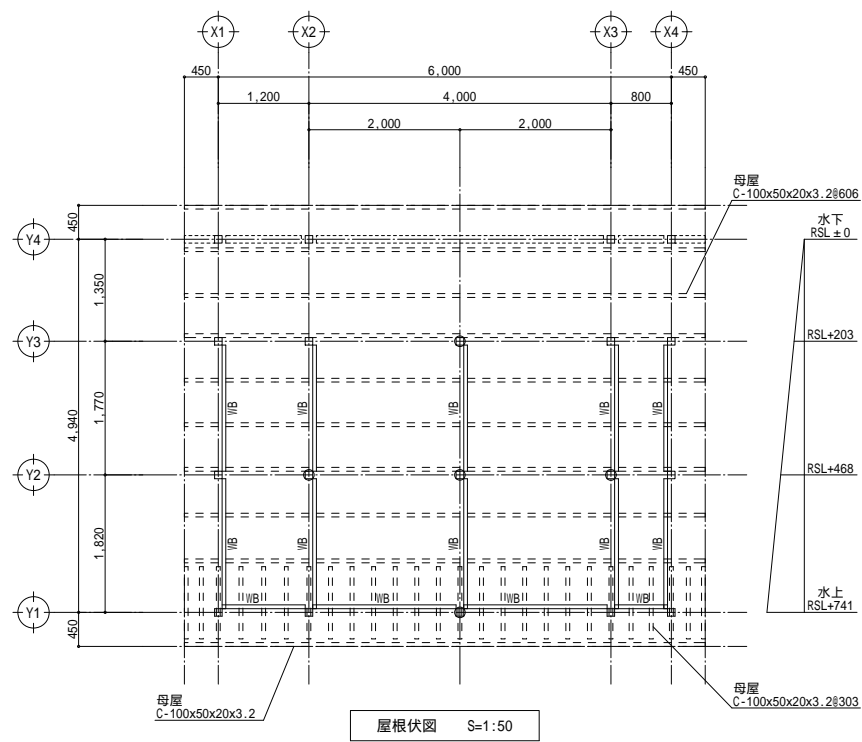




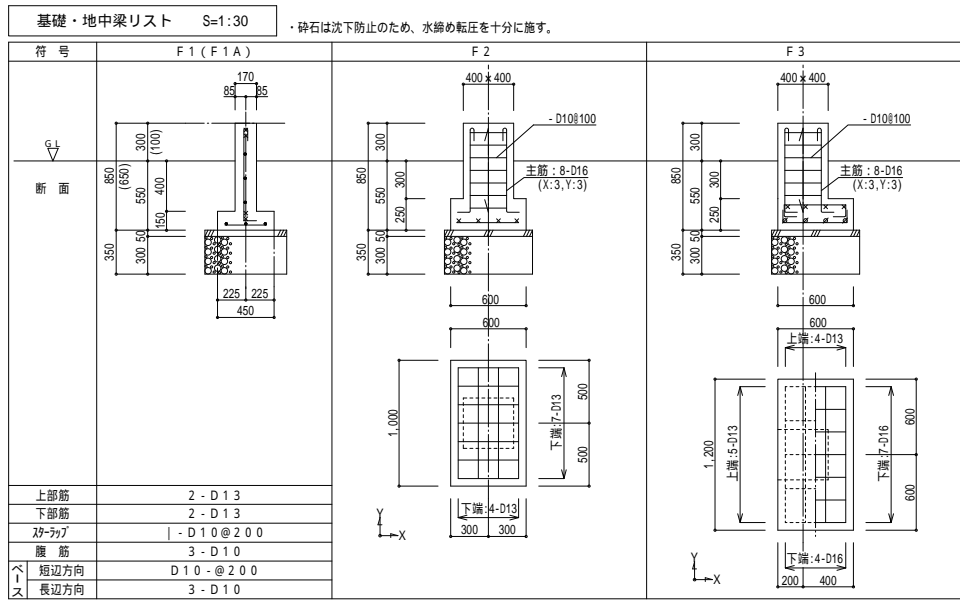
- 基礎伏図 S=1:100
- 特記事項
- ・特記なき基礎は、全てF1とする。
 - ・特記なきフーチング下端位置は、GL-550とする。
 - ・砕石は沈下防止のため、水締め転圧を十分に施す。



- 小屋伏図 S=1:50
- 特記事項
- ・ 部材は、水平ブレース：M16を示す。
 - ・▽印は、鉛直ブレース：M20を示す。
 - ・▼印は、鉛直ブレース：M22を示す。
 - ・○印は、小屋束： - 100x100x2.3を示す。



- 屋根伏図 S=1:50
- 特記事項
- ・○印は、小屋束： - 100x100x2.3を示す。
 - ・ 部材は、母屋：C-100x50x20x3.2を示す。



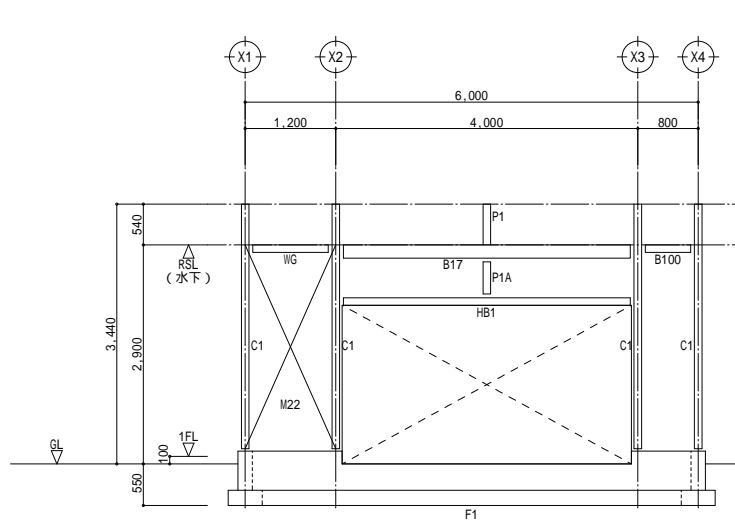
共 通 事 項	
使用コンクリート	
基礎・地中梁コンクリート	F c - 24 $\frac{N}{mm^2}$ ・ S - 18 cm
土間コンクリート	F c - 21 $\frac{N}{mm^2}$ ・ S - 18 cm
捨てコンクリート	F c - 18 $\frac{N}{mm^2}$ ・ S - 15 cm
使用鉄筋	
D 10 ~ D 16	S D 2 9 5 (重ね継手)
地耐力	
長期	= 35 $\frac{KN}{m^2}$
短期	= 70 $\frac{KN}{m^2}$



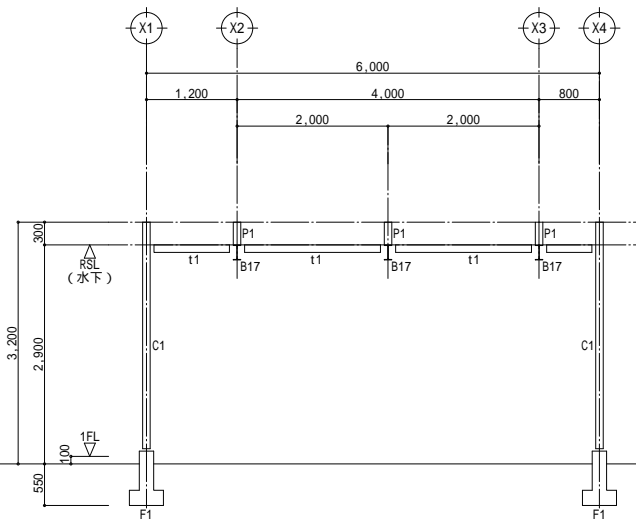
株式会社 八洲建築設計事務所
YASHIMA ARCHITECTS & ENGINEERS

一級建築士284561号 鈴木健二

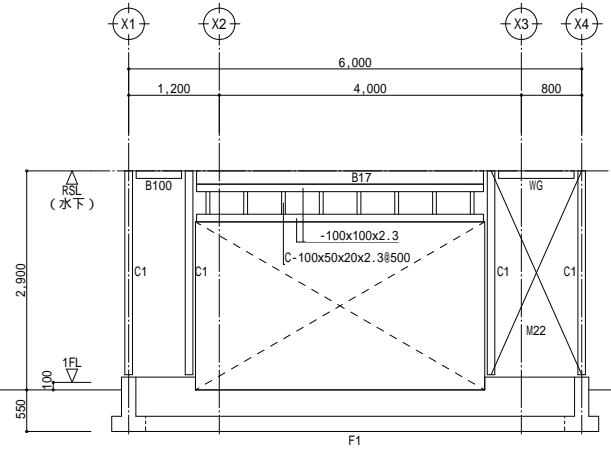
庁舎電気室改修工事	S — 08
【改修後】基礎伏図・基礎リスト 小屋伏図・屋根伏図	
SCALE (A1)S=1/50・1/30、(A3)S=1/100・1/60	DATE 2025.07



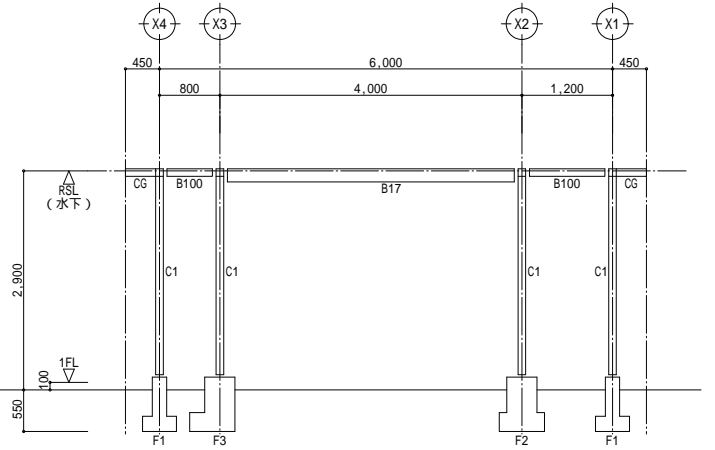
Y 1 通り軸組図 S=1:50



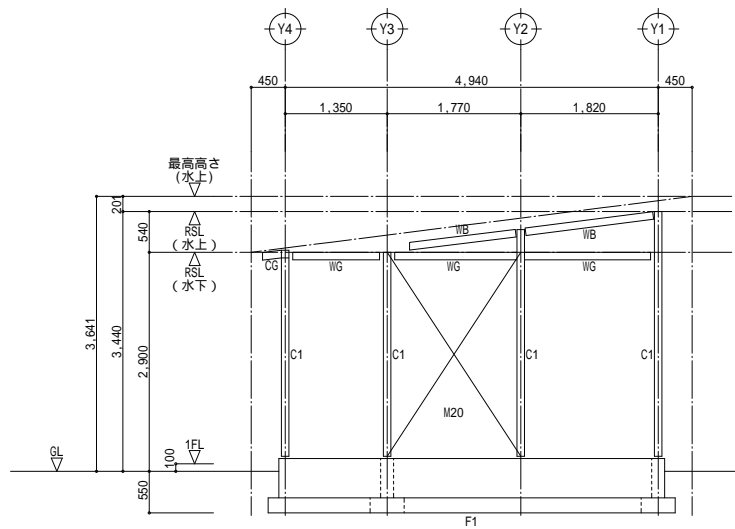
Y 2 通り軸組図 S=1:50



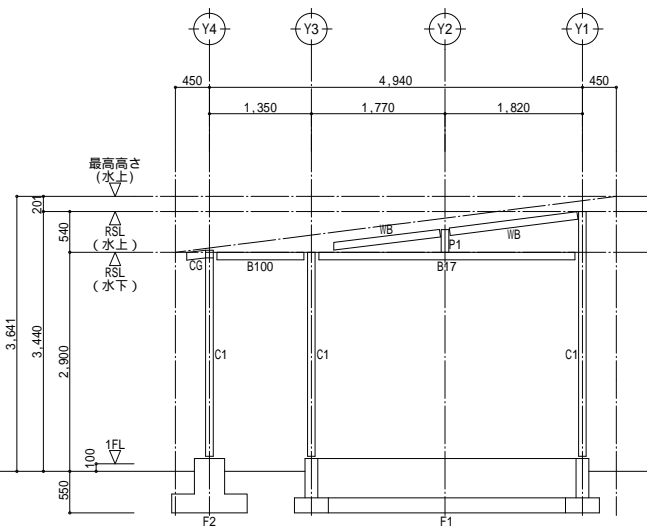
Y 3 通り軸組図 S=1:50



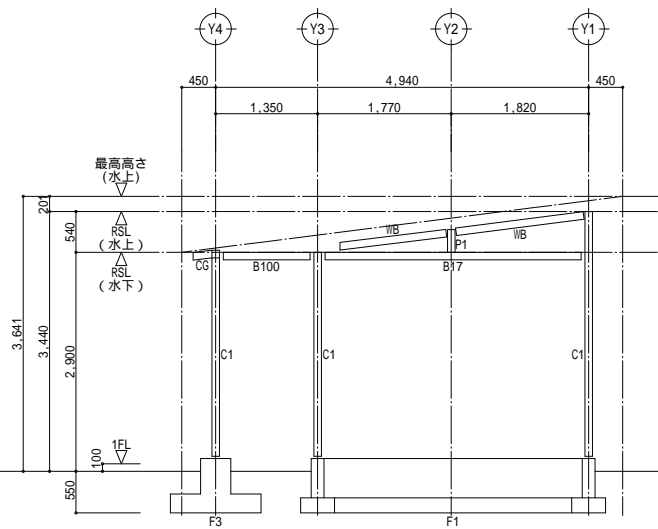
Y 4 通り軸組図 S=1:50



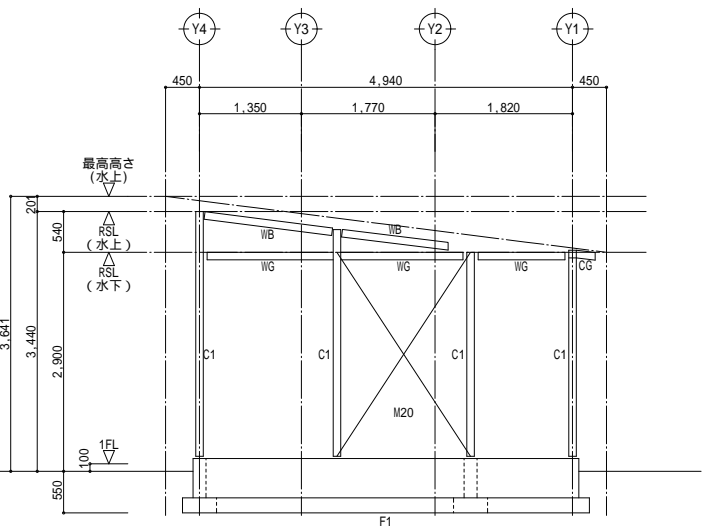
X 1 通り軸組図 S=1:50



X 2 通り軸組図 S=1:50



X 3 通り軸組図 S=1:50



X 4 通り軸組図 S=1:50



株式会社 八洲建築設計事務所
YASHIMA ARCHITECTS & ENGINEERS

一級建築士284561号 鈴木健二

庁舎電気室改修工事

【改修後】軸組図

SCALE (A1) S=1/50, (A3) S=1/100

DATE 2025.07

